特集

団塊世代は地域の子育て支援に貢献できるか？

「横並び型アクションリサーチ」によるアンケート調査からみえてきたこと

今年から、団塊世代が定年を迎え始めます。定年延長が導入されたり、第2の職場で働くとしても、これまでと比較すれば、自宅のある地域で過ごす時間は多くなることでしょう。

WACは2006年度、(財)こども未来財団からの委託、NPO法人彩の子ネットワークの協力で「勤労者・定年退職者への次世代育成推進セミナー」を実施しました。

そのなかで「横並び型アクションリサーチ―私はこう思うけど、あなたは？」を実施。55～59歳の団塊世代502人と、25～44歳の子育て世代459人の率直な声を集約しました。

たとえば、生き方観・子育て観について「子どもの育つ力尊重グループ」と「親の考え優先グループ」について比較検討しています。アンケートは「大いにそう思う」「まあそう思う」「あまり思わない」「まったくそう思わない」のなかから自分の考えを直感的に1つ選択していくという手法をとりました。

アンケートは、どちらかがよくてどちらかはよくないという結論を導き出すことを目的としたものではありません。ここから見えてきたことは「子育ての仕方・子どもの愛し方について、どちらのグループにも相反する2つの考えが混在している、だから問題を一人で抱え込まないで、世代を超えた地域の仲間とともに生きることの重要性・可能性をお互いに見つけ出していこうよ」というあたたかなメッセージのこめられたものでした。（詳しくは報告書に掲載されています。お申込みはWAC本部事務局へFAX03-5405-1502で。送料500円）

その経緯を発表したトークセッションが開催されましたので、当日の模様を報告します。

【トークセッション】

優劣を競い合うマニュアルから、いのちを養う物語へ

これまでのアンケートと何がちがうのか？

［渡邉］おはようございます。まず、この「横並び型アクションリサーチ」が普通のアンケートと違うところは、普段の生活の中で思っていることをそのまま言葉にして、質問項目を作っていくところです。そして、「私はこんなふうに思うんだけど、あなたは？」って、横並びで聞いていくんです。

アンケートは多くの場合、アンケートをとる側が知りたいことを聞いて、自分たちの考えているように分析して、その結果を自分たちの都合のいいように解釈していくという一方的なものがほとんどですが、この「横並び型アクションリサーチ」はアンケートの180度の転換だったと自負していま

《出席者》
●コーディネーター
渡邉　寛（NPO法人彩の子ネットワーク共同代表）
●団塊世代代表
川上康子（日伸産業アイデア事業部営業部長）
北　昌司（NPO法人コミュニティケア研究所所長）
渡辺新一（埼玉トヨペットはーとねっと輪っふる担当部長）
●子育て世代代表
小林知子（NPO法人彩の子ネットワーク副理事長／さいたま市子育て支援センター施設長）
重本敦子（NPO法人彩の子ネットワーク理事）

トークセッションの会場で

す。ここでは結論を出すことはありません。お互いがどう思っているかが照らし出されてきて、その上で、どんな価値観の人が同じ屋根の下にいたら、あんな事件が起こってしまうこともありうるんだな、とか、実感とつながりやすいところがたくさんあると思います。お互いが何を思っているかを考え、一緒に生きていきたい人と出会うこと、他人との関係がうまくつくれない人は、どうすればいい関係がつくれるようになるかを探す、そういう探し物をしていくアンケートだと思っています。

最初にやったのは7年前でした。そのとき「あなたは、あなたの子育てを国や世の中が応援していると実感できますか?」という質問がありました。ボクは、これが子育て中のお母さんから出されたということに驚きましたが、そのときの答は、77・4%が「いいえ」、実感がないという答でした。

今、さまざまな形で子育て支援がやられていますが、どこかボタンをかけ違っているような気もしますし、いろいろと課題が残っているのではないかとも考えています。

団塊世代と子育て世代が一緒につくったことに意味がある

今回のアンケートは実行委員会形式で、団塊世代と子育て世代が一緒になってつくっていきました。団塊世代・子育て世代というのは、とりあえずの呼び名です。どちらにもいろいろな人がいて、「あなたはお母さんだから」というように一括りにされては困るのです。ただ、なぜ団塊世代と子育て世代が一緒になって、子育ての話をしたかが重要です。これは、あるようで案外ないことなんです。「子ども未来財団」が大変な発案をして、それを受けて実施されたWACさんもすごく勇気があったと思うのです。

なぜかというと、子育て世代の方に聞いてみると、団塊世代の人ってものすごく遠い存在で、会うと上から物言ったり文句言ったりするし、いらないものをくれたりとか、なんか愛し方が違うんじゃないの、というような率直な意見がでてきます。

実行委員会で、こんな会話がありました。あるお母さんから、「夫が単身赴任で、しばらく帰ってきていない。昼間、子どもと2人でいるときに、自分がもし突然死したら、いつ、誰が、この子を発見してくれるだろう、と考えて、すごい不安に襲われることがある」という話がでました。そうしたら、団塊世代の方たちは思いやりに満ちていますので、「人間はそう簡単には死なないから、大丈夫。肩の力を抜いて、元気でやりなさい」と、一生懸命励ましたのです。そうしたら、20代の若い女性から「本人が不安だって言っているんだから、どうして、ああ、そうなんだ、ってところから話が始まらないのでしょうね、この世代は」というような趣旨の発言があったのです。

一方で、団塊世代の方が「私たちは、若いお母さんたちが、そういう深い孤独感のなかで子どもを育てているってことを知らなかった。自分たちも年をとり、最後は一人で死んでいく。最近は一人で

亡くなっているケースも多いし、家族と一緒にいても餓死してしまったりする時代だ。そういう孤独で、さみしい時代を生きているというところでは本当に同じだなって思えた」と発言なさったんです。

それが、今日のこのトークセッションの出発点になっています。私たちの想像を超えて孤立しているお母さんたち。その上、子どもを抱く初めての経験が自分の子どもであるというような少子高齢化時代の中で、子育てをしている世代。小さい命をあずかりながら、自分の人生をどう組み立てていくかを考えている世代が、ここぞっていうときのために支えあっていけるようなネットワークをつくっていくために、ここから対話を始めようという出発の日だとご理解いただければと思います。

それぞれの思い

自動車のショールームを地域のふれあいの場に

[渡辺] JR埼京線・北与野駅の近くの埼玉トヨペットのショールームを利用して、高齢者・障害者・子どもたち・地域の人たちがふれあう場「はあとねっと輪っふる」をつくっています。

私は1948年、宮城県の山の中で生まれました。もともとは車を販売する営業マンでした。それから今の世界、はあとねっとにきたんです。ここにきて、さまざまな人たちと関わるようになり、ノーマライゼーションという言葉の意味も初めて身をもって感じるようになりました。

養護学校の生徒さんが、私どもの会社に実習にきます。そのときに我々はいろんな勉強をさせられます。会社の人間もそうですし、親御さんたちもそうだと思うんです。話を聞いていると、障害を持っている子どもを表に出すと迷惑がかかるから、あまり出さないようにしているという話も聞きます。お客さんがくると、お前は押入れに入っていろと押し込められたという話も聞きました。そこで、私たちは会社のショールームや会議室を開放して、ノーマライゼーションについての勉強会もしております。

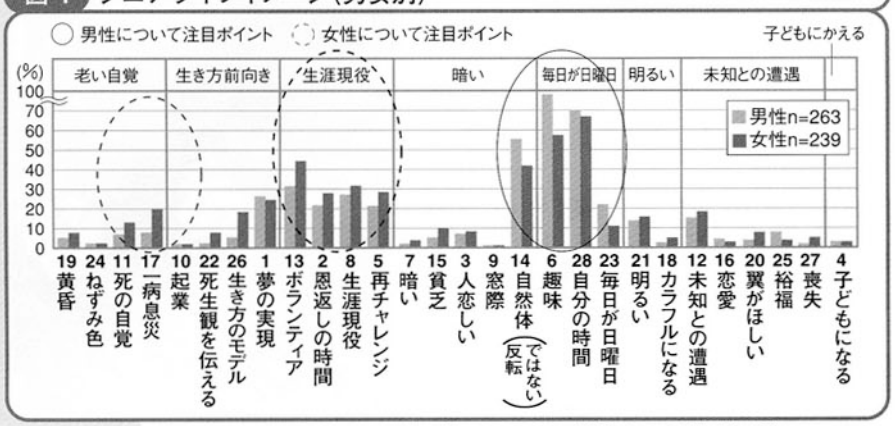
赤ちゃんサロンを通じて彩の子ネットさんと知り合って3年。壁で仕切って、裏では会社の研修をやっていることもあり、時々「さっきはだいぶんうるさかったね」、「ええ、子どもさんが20人近くいましたから」というようなやりとりもあります。しかし5年もやっていると、社内でも徐々に認められてきました。重本さんや小林さんとは赤ちゃんがお腹にいるときに知り合い、生まれてきたら、自分の孫ができたような感じです。やはり大人も子どもも、障害があってもなくても、コミュニケーションが一番大事なんじゃないかと常日頃思っています。それがないと、なかなか前へ進めないように思います。

「はあとねっと輪っふる」にはたくさんの親子がやってくる

「わたなべさん」は子どもたちからひっぱりだこの人気者

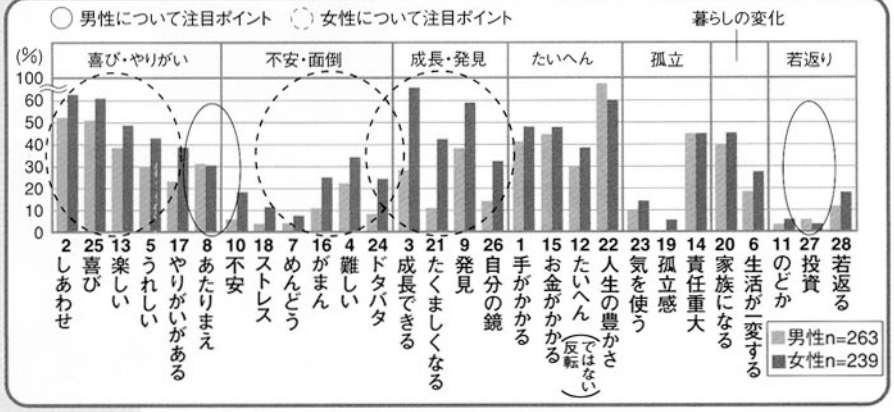
[川上] 私の母は積極的で、人前がすごく好きな人でした。でも私は劣等感の塊で、内気で、話すのが大嫌いという恥ずかしがり屋の子どもでした。人前がすごく苦手でしたが、それでも「自分はなぜ生きているのか」「どういう風に生きたらいいのか」「世の中に貧富の差があるのは許せない」というような難しいことを考えている子どもでした。そういうことは、親にはもちろん話しませんが、その解決方法として、自分は発明家になって世の中を救いたいと考えていたんです。でもそんなことは、母も家族も知らなかったと思うんです。だから今、お子さんたちを見ていると、すごいこと考えてる

図-1 シニアライフイメージ（男女別）



◆男性の女性より高いシニアライフイメージは、「毎日が日曜日」「自分の時間」「趣味」。
◆女性が男性より高いのは、「再チャレンジ」「死生観を伝える」「ボランティア」「生き方のモデル」等、積極的かつ具体的でリアリティがある。

図-2 子育てイメージ（男女別）



◆男性が女性より高いのは、「投資」「あたりまえ」のみ。
◆女性が男性より高いのは、「成長できる」「発見」「喜び」「うれしい」など前向き。また一見マイナスイメージの「不安」「がまん」「ドタバタ」なども高く、「子育て」の全体に向き合っている。

んじゃないかと、自分の体験を映してしまうんです。私はまだ夢の途中ですので、これから頑張りたいと思っています。

子どもには「しっかり頑張れ」、妻には「飯、風呂、寝る」の世代

［北］私は実行委員会のメンバーとして、エピソード質問を担当しました。

昭和21年生まれの60歳。大学はヘルメットと棍棒の時代で、卒論を書かなくても卒業できた世代です。ある生活協同組合に入ったら、そこが非常に大きくなって、仕事をしたらしただけ成果につながるという充実感のある仕事でしたので、一生懸命頑張ってきました。しかし早期退職制度ができ、辞めるのがその団体のためだ、みたいな悲哀も味わってきたのが団塊の世代だと思っています。私も定年の3週間ぐらい前に上司に呼ばれ、引続き勤めてほしいといわれましたが、仕事は同じで給料は4割下がるという話でした。それで、この4月以降、これからの夢や未来像をどう描いていこうかと考えているところです。

先程、コーディネーターの渡邉さんから、団塊世代は若いお母さんに「肩の力を抜いたらいいんだよ」とか言って、かえってお母さんを追い詰めたりする世代でもあるといわれましたが、そういう意味では自分の人生を振り返ってみて、やっぱり生まれ変わらないとダメだと思います。

アンケートの中に、子どもには「早くしっかり頑張って」といい、妻には「飯、風呂、寝る」というのがありますが、私もこのパターンでこれまでの人生を過ごしてきました。子どもの学校参観や地域の役員からも逃げ回ってきましたので、本当にこれから地域に帰れるかなあと心配です。

言葉ではなくて通じ合えるもの

［小林］「彩の子ネットワーク」で活動しています。私の父親がちょうど昭和21年生まれ。父も、言葉では言わないけれど「頑張れ！」ということを絶えず言われているように感じていました。今回の質問をつくるなかで、そういう言葉ではない「無言の言葉」っていうものについて考えました。「言葉にはできないことを理解してもらえることが、生きる意欲につながる」というところです。

私には6歳と3歳の子どもがいますが、自分の子どもだけでなくいろんな子どもたちと関わるなかで、言葉ではないけれど通じ合えるものがあるということを強く感じています。大人だけの世界で仕事をしていたときとは違って、そういう言葉ではない関係があることを日々実感しつつ、他の皆さんはどんなふうに感じているだろう

地域活動の紹介を聞いている子育て中の親子

企業の地域活動の取り組みも紹介されました。

子育て中のママもおんぶしながら一緒に進行

ということが気になっているところです。

知り合いもなく子育てする不安

[重本] 3ヵ月と2歳半の子どもがいる母親です。私は、夫の転勤で岡山から埼玉の上尾に引っ越してきました。それまではずーっと仕事をしており、毎日忙しくしておりました。それで、仕事を辞めて結婚と同時に移ってきて、毎日何もすることがないという日々になりました。買い物以外は外に出て行く必要がないという生活が始まったのです。夫は出張が多い仕事で、1週間に2～3日ぐらいしか家にいない。最初は、何でも好きなことができると思っていましたが、だんだんと何もすることがない日が恐ろしくなってきて、私ってなんで生きているんだろうと考えるようにもなってきました。夫はそんな私を気づかって、愛してるよ、退屈じゃなかった？って言ってくれるんですが――その頃妊娠して、これから子育てっていう未知の世界に入っていくんだなと思ったとき、この地域には知った人が全然いない。子育てに困った時、誰に相談すればいいんだろうととても怖かった。

質問の中に「里親という生き方はいいと思う」って答えられた方が多かったんですが、そう思わない私はなんだろう、っていうことがすごく気になって、その答を見つけられたらいいなと思っています。

[渡邉] 転勤してきて一人になって、赤ちゃんが生まれるまでは、毎日が日曜日という経験をされたわけで、そういう意味では団塊世代の先輩ですよね。

先ほど北さんは、シニアライフのイメージを「夢の実現」として非常に積極的に捉えられていましたが、リサーチ全体で見てみると、本当に積極的かは疑問だし、男性と女性でもかなり違いがあります。そこのところはどうお考えでしょうか。

団塊世代の男性はこれまでの価値観を変える必要がある

[北] 【図―1】「シニアライフのイメージ」を見ていただくと、生涯現役とかボランティアだとか、シニアライフを積極的に捉えているのは圧倒的に女性が多い。これは団塊世代の男性が消極的でいけないということではなくて、彼らがこれまで生きてきた人生を反映しているのです。家父長的な父親に育てられ、地域も含めまだ生活の中には共同の意識があり、そして「会社人間」として働いてきた。それが90年代の初めにバブルが崩壊して早期退職にも直面することになった結果が、こういうことだということです。男性が女性よりも多いのは、【図―2】の右から2番目の投資だけです。

また【図―4】を見ると、衝撃的なことに約15％の女性が夫と一緒のお墓に入りたくないと考えています。このままでいくと、団塊世代の男性は墓無い（儚い）人生を送ることになりかねません。だから男性も少し価値観を変えて、夫婦で充実感のある人生を生きていくにはどうすればいいかを考えた方がいいようです。

子育てについての相反する2つの「愛してる」

[小林] 今回アンケートを分析していて見えてきたのは、団塊世代の男性で「妻と一緒に生きていきたい」という回答の中に、「妻を尊重して共に」という人と「君にいつまでも依存型」の2つのタイプがあるということです。そのなかには、今までの男女関係じゃなくて、お互いを尊重しつつ自立して生きる、よりよい夫婦関係が欲

しいと考えている人もいることが見えてきました。

子育ての仕方にも、AB2つの「愛してる」が見えてきました。子どもの育つ力を尊重する傾向が強いAタイプと、親の考えを優先して子育てをしたい傾向の強いBタイプがあったということです。

質問としては、Aは「子どもは大人の知りえないそれぞれの世界を生きている」「子育ては子どもの自ら育つ力への信頼から始まる」など。Bは「習い事は子どもの将来にプラスだからいろいろさせる方がいい」「早くしっかり頑張ってというのは、この社会で生きる力を育てる」といったもの。

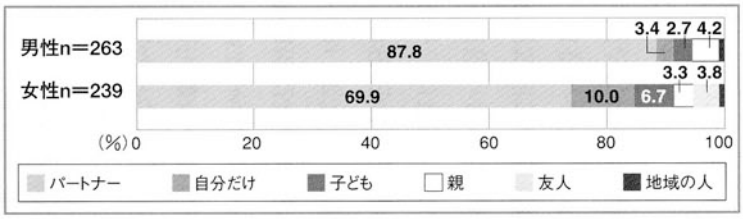
グラフを見てもらえばわかりますが、【図―5】はAタイプが強く肯定し、【図―6】はBタイプが肯定している割合が高いということです。

【渡邉】 今回のアンケートで思いがけずくっきりと傾向が見えてきたことが多々あります。AB2つの子育て感があるが、はっきり分かれているかというと、そうでもありません。子どもはいろんな可能性をいっぱい持っているので、親は必ずAB両方の面を持っているわけで、それを前提としてどっちにアクセントが置かれているかの違いをみていく。そうすると、他の質問に対してもある傾向が浮かび上がってくるということです。

子どもの育つ力を尊重する方は、親が自分の可能性も大事にしていることが子どもの将来を拓くことにもなる。みんなで子育てすることは子どもを親の私物化から解放することにもなるし、なかには里親として子どもと関わりたいと思う、というような考えが多く出てくるのです。一方、親の考えを優先するというBタイプでは、子どもが小さいうちはお母さんが頑張ってやってね、子育てっていうのは私事なんだから、家族で背負って頑張ってやっていくんだよという傾向を持っている。どちらかというと性別役割分業的な考えに肯定的な考えを持っていて、体罰についても容認傾向がある、というふうに見えてくるんです。

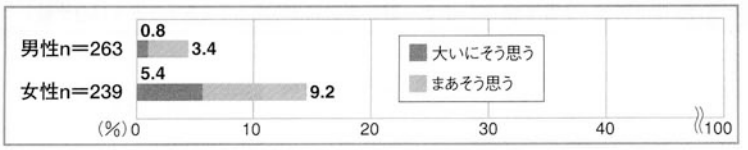
どちらがいいとか悪いとか言っているのではなく、アンケート結果をみんなで分析してみたら、そういう自分たちの姿が浮かび上ってきた。AとBの間には80%ぐらいの幅があって、その間で多くの

図-3 これからの人生を誰とともに生きたいか（男女別）



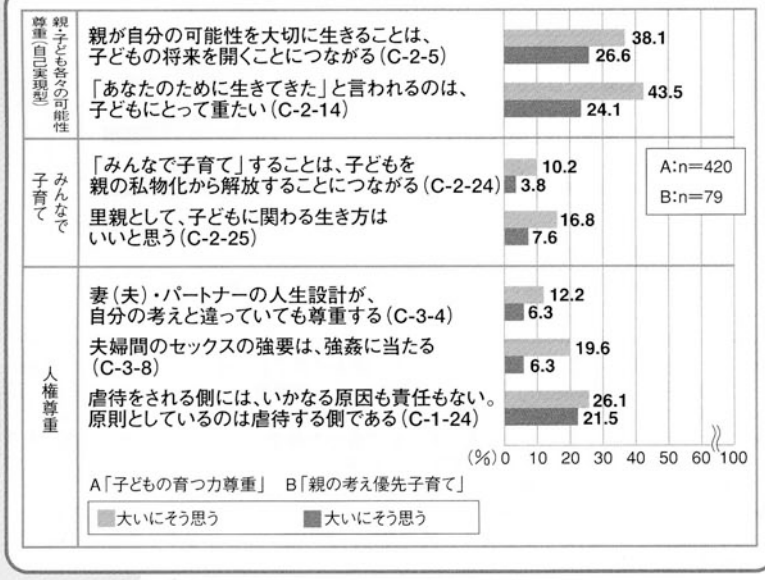
◆男性の約90%が「パートナー」と
◆女性は約70%が「パートナー」と
◆10人に1人が「自分だけ」で、と答えている。

図-4 夫・妻（パートナー）と一緒のお墓にはいりたくない



◆女性の7人に1人が「夫と一緒のお墓に入りたくない」

図-5 生き方観・子育て観・パートナー観（「大いにそう思う」AB比較）



人々が葛藤している。一見反対の生き方観でもありますが、私たちのなかにしっかり両方入っているってことだと思います。

子ども自身の生きる力を実感できたとき

[重本] 今2歳半の最初の子どもが、何かしたいと言いはじめた時、ワガママなんじゃないのか、私のしつけが悪いんじゃないか、とか、心の中で揺れ動く日々があって、じゃあ私はどうすればいいんだと、Bの方へどんどんはまっていく自分がいました。でも二人目の子どもを生んだとき、お医者さんや助産師さんが「生まれてくる子どもをちゃんと感じながら生むんだよ」って言ってくれた。そのとき、まだ顔を見たこともないお腹の中の子どもが生きていこうとする力を信じる、ということが体感として感じられたんです。

それで出産後、私のなかで子育て観が変わって、子どもをもっと信じていいんだ、こういうふうに育てるべきだという枠をはずしていいんだと感じられるようになってきました。

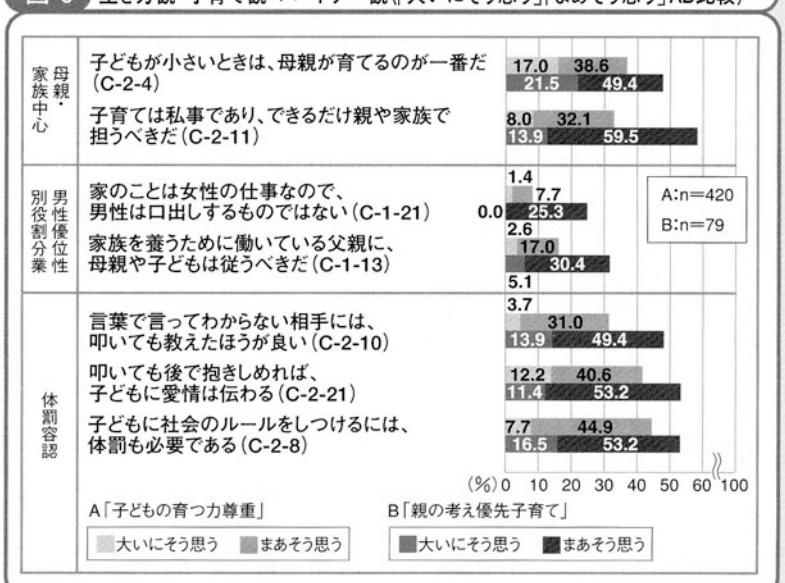
[小林] 私も、今6歳の娘が2歳ぐらいのときは、とても周りのことを気にしていて、迷惑をかけないように、目立たないように、と小さくなって暮らしていました。それが自立だというイメージもあった。ところが「彩の子ネットワーク」との出会いがあって、今は他の人が、この子はこんなんだよって伝えてくれるし、たいへんなときも助けてほしいって言っていいんだよってわかるし、そういったさり気ない支えを本当にうれしく思います。

[渡邉] 川上さんから、若い人に何か言っておきたいことはありませんか?

[川上] 何かが見えれば先が見えるって言われた方がいましたが、そのためには何をすればいいのか? それは行動しかないと思うんです。結果を考えると行動できなくなってしまうので、まず行動して、間違えば修正する。恐れないで行動してみることが大事なんだろうと思います。団塊世代は押し付けがましいところがあるので、これは遠慮しながら言っているんですけどね。(笑い)

[重本] これまでずっと話し合ってきたなかで、私たち子育て世代は自分も子どもも、そして周りの人もお互いに尊重しあって生きていきたいんです。一方、団塊の世代の方たちが地域に帰ってくるというターニングポイントで、ABどちらの生き方もあるんだという話を聞きました。そして、そのことが大事だと言われているのを聞いて、そんな団塊の世代の方たちも私たち子育て世代も、みんな揺れ動きながら生きているんだということが分かり合えたこのアクションリサーチを通して、これからは地域で一緒に子育てをしていけたらと思いました。皆さん、どうぞよろしくお願いします。

図-6 生き方観・子育て観・パートナー観(「大いにそう思う」「まあそう思う」AB比較)



◆A「子どもの育つ力尊重」は、B「親の考え優先子育て」に比べ、「親・子ども各々の可能性尊重(自己実現型)」「みんなで子育て」「人権尊重」に肯定的な人が多く、「母親・家族中心」「男性優位性別役割分業」「体罰容認」に肯定的な人が少ない。

◆B「親の考え優先子育て」は、A「子どもの育つ力尊重」に比べ、「母親・家族中心」「性別役割分業」「体罰容認」に肯定的な人が多く、「親・子ども各々の可能性尊重(自己実現型)」「みんなで子育て」「人権尊重」に肯定的な人が少ない。

◆A「子どもの育つ力尊重」とB「親の考え優先子育て」は、「生き方観」「子育て観」に総じて正反対の傾向がうかがえる。先に見た男女の違いが、少なからずここにも投影されているといえよう。